

令和 7 年 6 月 2 6 日	病害虫発生予報 7 月 号	茨城県病害虫防除所
---------------------	------------------	-----------

防護装備（マスク・保護メガネ・防護衣）をきちんと着用しましょう。

～令和 7 年度茨城県農薬危害防止運動期間（6/15～9/14）～

< 目 次 >

I. 今月の予報	
【注意すべき病害虫】	
水稻：いもち病（葉いもち）・・・・・・・・・・・・・・・・	1
【防除所レポート】BLASTAM による葉いもちの感染好適条件の状況について・・・・・・・・	1
○水稻の斑点米カメムシ類の発生に注意しましょう！・・・・・・・・	2
○水稻における紋枯病の防除対策について・・・・・・・・	3
サツマイモ：ナカジロシタバ・・・・・・・・	3
ナシ：黒星病・・・・・・・・	4
ナシ：ナシヒメシンクイ（第三世代幼虫）・・・・・・・・	4
【防除所レポート】ナシヒメシンクイの防除適期の予測・・・・・・・・	5
果樹共通：果樹カメムシ類	
（チャバネアオカメムシ、クサギカメムシ、ツヤアオカメムシ）・・・・・・・・	5
夏ネギ：ネギアザミウマ・・・・・・・・	6
夏秋ナス：チャノホコリダニ・・・・・・・・	6
共通害虫：シロイチモジヨトウ・・・・・・・・	7
○施設野菜の栽培終了後の管理について・・・・・・・・	7
○サツマイモ基腐病の防除対策（生育期）・・・・・・・・	8
【その他の病害虫】水稻、ナシ、ブドウ、夏ネギ、夏秋ナス、共通害虫・・・・・・・・	9
II. 今月の気象予報	10

最新の農薬登録内容は、農林水産省ホームページの
「農薬登録情報提供システム」(<https://pesticide.maff.go.jp/>) で確認することができます。

詳しくは、茨城県病害虫防除所へお問い合わせ下さい。Tel :0299-45-8200

ホームページでは病害虫・フェロモントラップ・農薬関連情報をご覧いただけます。

<https://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/nosose/byobo/boujosidou2/>



※病害虫の発生状況や、適切な防除方法は地域により異なる可能性があります。病害虫の防除や農薬についてのご相談は、お住まいの都道府県にある病害虫防除所等の指導機関にお問い合わせください。

I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

水 稲

1. いもち病（葉いもち）

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
—	平年並	県下全域

[予報の根拠]

- ① 6月下旬現在、葉いもちの発病度¹⁾（本年値0.1、平年値0.1）は平年並～やや高く、発生地点率（本年値4%、平年値4%）は平年並である。
- ② 葉いもちの感染好適条件（BLASTAM2）による）は、6月第2、3半旬に県内の広範囲で認められたが、6月25日までの出現日数は平年並である（下記、防除所レポート参照）。
 - 1) 発病度：株ごとの発病程度をもとに算出した数値、最小値は0で最大値は100となる。
 - 2) BLASTAM：アメダスデータ4要素（気温、降水量、風速、日照）から、その日が葉いもちの感染に好適であったかを判定するプログラム。

[防除上注意すべき事項]

- ① 置苗は、いもち病の発生源となるため、現在水田に置苗がある場合には、水田やその周辺に放置せず、持ち出して適切に処分をする。
- ② イネの葉色が濃い所や水口等を観察し、初発の確認に努め、発生初期に防除を実施する。
- ③ 粒剤等で防除する際は、効果が現れるまで時間がかかるため使用時期に注意するとともに、湛水状態で薬剤を散布し、1週間は止水して湛水状態を保つ。
- ④ 例年、梅雨明けまでは発生が増加するため、現在発生がみられない水田でも注意する。
- ⑤ 殺菌剤を複数回使用する場合、薬剤感受性の低下を防ぐため、FRACコードの異なる薬剤を選択する。

防除所レポート [BLASTAMによる葉いもちの感染好適条件の状況について]

- ① 葉いもちの感染好適条件（BLASTAM¹⁾による）は、6月第2、3半旬に県内の広範囲で認められたが、6月25日までの出現日数は平年並である（表）。
- ② 曇雨天が続く等、発病の好適条件が見られる場合はいもち病の発生に注意する。なお、葉いもちの発病は、感染好適条件が出現した日から7～10日後に始まると考えられる。
- ③ 各地点のBLASTAMによる葉いもちの感染好適条件の詳細については、病虫害防除所ホームページで情報を随時更新しているので参考にする。

1) BLASTAM：アメダスデータ4要素（気温、降水量、風速、日照）から、その日が葉いもちの感染に好適であったかを判定するプログラム。

表 BLASTAMによる葉いもちの感染好適条件の地域別の平均出現日数（6/1～6/25）

	県北	県央	鹿行	県南	県西
本年値	0.8	2.0	2.0	1.7	3.0
平年値	1.4	1.5	1.9	2.0	1.9

水稻の斑点米カメムシ類の発生に注意しましょう！

～近年発生の多い地域や常発地では特に注意して下さい～

本県において斑点米カメムシ類による斑点米は、等級格下げの要因の一つになっています。クモヘリカメムシ（写真1）、アカスジカスミカメ（写真2）等の斑点米カメムシ類の成虫は、水稻の出穂前は畦畔や周辺のイネ科雑草地に生息し、出穂とともに水田に侵入します。6月下旬、水田周辺のイネ科雑草地ですくい取り調査をした結果、斑点米カメムシ類は平年並～やや多い発生でした（表）。なお、近年、発生が多くなっているイネカメムシ（写真3）は他の斑点米カメムシ類とは異なり、越冬場所から早生品種の出穂に伴って水田に直接飛来する傾向があります。

周辺水田と出穂期が異なる水田は、集中的に被害を受ける恐れがあるので注意して下さい。

〔防除対策〕

- ① 水田周辺のイネ科雑草は、カメムシ類の生息場所となるので除草に努める。ただし、水稻の出穂期近くに除草すると、カメムシ類を水田内へ追い込むことになるので、出穂直前の畦畔等の草刈は行わず、水稻の出穂2週間前までに終わらせる。
- ② ふ化直後のカメムシ類幼虫は非常に小さく、発生に気がつかない場合があるため、水田内をよく観察する。
- ③ 登熟初期にイネカメムシによって集中的に稲穂を吸汁加害されると、著しい不稔被害が発生することがある。本種の発生が多い地域では、不稔被害の軽減を目的とした防除を出穂期～穂揃期に行う。
- ④ 乳熟期以降にカメムシ類の密度が高いと斑点米の発生量が多くなる。斑点米被害の軽減を目的とした防除は、出穂後10～15日頃（乳熟期）に行う。防除を実施した水田であっても、その後に幼虫がふ化、新成虫が再飛来するため、発生を認めた場合は追加防除を実施する。
- ⑤ 防除の際には、収穫前日数や使用回数および周辺作物（特に早生品種を作付している水田）への飛散に注意する。

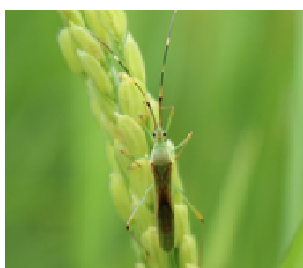


写真1 クモヘリカメムシ(成虫)

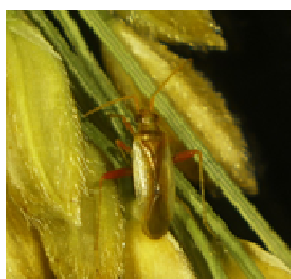


写真2 アカスジカスミカメ(成虫)



写真3 イネカメムシ(成虫)

表 水田周辺の雑草地における斑点米カメムシ類の発生量（6月下旬調査）

地域	調査 地点数	すくい取り虫数(頭/10回振り)		
		本年	平年	順位
県北	1	14.0	6.7	2
県央	2	6.0	3.3	4
鹿行	1	10.0	11.7	3
県南	4	3.8	6.3	4
県西	2	4.0	6.1	6
全県	10	5.9	6.2	4

平年：平成27年～令和6年までの10年間の平均値。
順位：本年を含む過去11年間における本年値の順位。

水稻における紋枯病の防除対策について

紋枯病は、前年のイネの病斑上に形成された菌核が圃場にとどまり次作の伝染源となるため、毎年同じ圃場で発生しやすい傾向があります。昨年、発生が多かった圃場では特に注意して対策を行いましょう。また、気象予報によると、向こう 1 か月の気温は平年より高いと予想されており、発生を助長する条件であるため、発生に注意しましょう。

[特徴]

前年の被害株や畦畔等の罹病雑草に形成された菌核で越冬し、伝染源となる。菌核は代かき時に水面に浮上し、株元に漂着する。気温が上昇し、株間の湿度が高くなると、菌核から発芽した菌糸が伸長して葉鞘内に侵入し、楕円形病斑をつくる。本病にかかると、下葉から次第に枯れ上がり、イネの茎が弱くなって倒伏しやすくなる。

[防除上注意すべき事項]

- ① 病斑は水際に近い下部の葉鞘から現れ、次第に上位に進展するため、薬剤散布は下部の葉鞘にまでかかるように行う。
- ② 前年発生がみられた圃場では本病が発生しやすいため特に注意し、発生が認められた場合には早期に防除を行う。

サツマイモ

1. ナカジロシタバ

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 6 月下旬現在、被害つる先率（本年値 7.2%、平年値 3.4%）は平年よりやや高く、発生地点率（本年値 20%、平年値 36%）は平年並である。
- ② 6 月下旬現在、100 葉当たりの寄生虫数（本年値 0.8 頭、平年値 0.2 頭）は平年よりやや多く、発生地点率（本年値 20%、平年値 18%）は平年並である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 老齢幼虫になると薬剤の防除効果が劣るので、若齢～中齢幼虫の時期（つる先や上位葉に丸く穴の開いた葉が散見される時期）の防除に努める。
- ② 圃場をよく観察し、防除適期を逃さないように注意する。
- ③ 薬剤散布の際は、幼虫が生息する葉裏までよくかかるよう丁寧に散布する。

ナ シ

1. 黒星病

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
—	平年並	県下全域

[予報の根拠]

- ① 6月下旬現在、発病果率（本年値 0.1%、平年値 0.4%）、発生地点率（本年値 25%、平年値 37%）ともに平年よりやや低い。
- ② 6月下旬現在、県予察圃（笠間市）における発病果率（本年値 4.8%、平年値 2.7%）は平年よりやや高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 発病した葉および果実等は二次伝染源となるため見つけ次第除去し、園外に持ち出して適切に処分する。
- ② 薬剤散布は、発病部位を除去した後に行うとより効果的である。
- ③ 薬剤は、10a 当たり 300 リットルを目安に丁寧に散布する。圃場の周縁部等、薬液のかかりにくい部分に対しては、手散布等により補正散布を行う。

2. ナシヒメシンクイ（第三世代幼虫）

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 6月下旬現在、被害果を認めず平年並である。
- ② 6月第4半旬までのフェロモントラップへの総誘殺数は、笠間市、小美玉市、土浦市、筑西市（関城地区）で平年よりやや多く、筑西市（下館地区）で平年並、かすみがうら市で平年よりやや少ない。

[防除上注意すべき事項]

- ① 被害果実を見つけた場合は、速やかに処分し、成虫の発生を防ぐ。
- ② 薬剤は、10a 当たり 300 リットルを目安に丁寧に散布する。圃場の周縁部等、薬液のかかりにくい部分に対しては、手散布等により補正散布を行う。

（次ページ、防除所レポート参照）

防除所レポート【ナシヒメシンクイの防除適期の予測】

- ① ナシヒメシンクイ第三世代幼虫を対象とした防除適期は、第二世代成虫の誘殺数がピークに達した日の1～2日後である。
- ② 各地点の第二世代成虫の誘殺最盛期は、第一世代成虫のフェロモントラップへの誘殺最盛期と有効積算温度から予測した。
- ③ 表中の土浦市、かすみがうら市、筑西市(下館地区)については、今後、病害虫防除所ホームページで誘殺状況を随時更新するので参考にする。

表 調査圃場におけるナシヒメシンクイ第三世代幼虫の予測防除適期

地点	第三世代幼虫の予測防除適期 ¹⁾		
笠間市	7月20日	～	7月24日
小美玉市	7月21日	～	7月28日
石岡市	7月10日	～	7月14日
かすみがうら市	7月18日	～	7月22日
土浦市	7月18日	～	7月22日
筑西市(下館地区)	7月13日	～	7月18日
筑西市(関城地区)	7月13日	～	7月18日

1) 第一世代成虫の誘殺最盛期を基に予測した(6月23日現在)。

果樹共通

1. 果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ、クサギカメムシ、ツヤアオカメムシ）

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	平年並～やや少ない	県下全域

[予報の根拠]

- ① 6月第3半旬までのかすみがうら市の果樹園内に設置した予察灯への誘殺数（本年値73頭、平年値320頭）は平年並～やや少ない。
- ② 6月第3半旬までの笠間市の果樹園内に設置した予察灯への誘殺数（本年値95頭、平年値679頭）は平年よりやや少ない。

[防除上注意すべき事項]

- ① カメムシ類は夜温が高くなると活動が活発になり、果樹園に飛来する。果樹園内でカメムシ類を確認した場合は、活動の鈍い早朝に薬剤防除を行う。
- ② カメムシ類の発生時期や発生量は地域や圃場によって異なるため、定期的に圃場全体を観察し、早期発見と薬剤による初期防除を徹底する。

夏ネギ

1. ネギアザミウマ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 6月下旬現在、被害度※（本年値 30.0、平年値 26.5）はやや高く、芯葉の被害株率（本年値 83.0%、平年値 81.1%）は平年並である。

※被害度：食害の程度をもとに算出した数値、最小値は0で最大値は100となる。

- ② 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年より高いと予想され、発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 気温の上昇に伴って増殖が速くなるので、発生圃場では速やかに防除を実施する。
- ② 雑草にも寄生するため、圃場周辺の除草を徹底する。
- ③ 薬剤散布の際は必要に応じて展着剤を加用し丁寧に行う。また、収穫前日数に十分注意する。
- ④ 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。

夏秋ナス

1. チャノホコリダニ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	多い	県北地域

[予報の根拠]

- ① 6月下旬現在、被害葉率（本年値 1.3%、平年値 0%）、被害果率（本年値 43.3%、平年値 4.0%）ともに平年より高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 発生が多くなると防除が困難になるため、初期防除を徹底する。
- ② 雑草はチャノホコリダニの生息場所となるため、圃場周辺の除草を行う。
- ③ 外見上健全であっても寄生されている可能性があるため、被害株が見られたら圃場全体に薬剤散布する。
- ④ 薬剤散布は生長点付近を中心に行い、薬液が新芽や果実、がくにもかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ⑤ 天敵を使用している場合は、影響が小さい薬剤を選択する。

共通害虫

1. シロイチモジヨトウ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い～多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 6月第4半旬までのフェロモントラップへの総誘殺数は、つくば市で平年よりやや多い～多い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 中齢以降になると薬剤の効果が劣るので、圃場をよく観察し、集団で生息する若齢幼虫の早期発見に努める。
- ② 幼虫が作物内に食入するとその後の防除が困難になるため、早期発見に努め、防除を徹底する。
- ③ 施設栽培ではハウスの開口部に防虫ネットを設置し、成虫の侵入防止に努める。
- ④ 薬剤散布は、薬液が葉裏や株元にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、複数回散布する場合は、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。

施設野菜の栽培終了後の管理について

近年、トマト黄化葉巻病、キュウリ退緑黄化病、ピーマン黄化えそ病など、微小害虫が媒介するウイルス病の発生が問題となっています。

栽培終了後の施設では、次作の病虫害防除のための管理を適切に行いましょう。

コナジラミ類、アザミウマ類などの微小害虫は、各種ウイルス病を媒介するので、ハウス外への飛び出しや次作への持ち越しを防止するため、株を誘引したまま根を引き抜き、2週間程度ハウスを密閉し、蒸し込みを行います。また、薬剤処理による古株枯死を行うことも効果的です。蒸し込み終了後は、作物残渣をハウス外へ持ち出して適切に処分してください。

サツマイモ基腐病の防除対策（生育期）

サツマイモが本病に感染・発病すると、栽培中に地上部の茎葉が枯死し、地下部の塊根（イモ）は腐敗していきます。また、周囲の健全な株にも病原菌が伝染するため、本病が圃場内にまん延し、大きな減収を招きます。育苗期から生育期、収穫期から貯蔵期まで、年間を通して発生するおそれがあるので、本病の侵入防止と早期発見に努めましょう。

〔病気の特徴〕

糸状菌（カビ）により引き起こされ、保菌した苗・イモ・残さ（畑に残った葉や茎、イモ）等が伝染源となる。圃場で発病すると、発病株に形成された胞子が風雨や圃場の停滞水等により周辺の株に広がり、感染が拡大していく。

〔防除対策〕

○作業にあたっての注意

- ・発生地域と行き来のあったコンテナ等は、洗浄、消毒してから使用し、残さや土を圃場に持ち込まない。
- ・作業する圃場ごとに、農機具や長靴等についた土は良く落とし、水でよく洗浄する。
※コンテナや農機具、長靴等の洗浄は、圃場の近くでは行わない。

○侵入に備えた対策

- ・育苗終了後は、苗床の残さを育苗ハウスから持ち出して適切に処分する。苗床は、耕うんして残さの分解を促したのち、梅雨明け後の高温期に太陽熱土壌消毒を行う。
- ・排水の悪い圃場は、本病が侵入した際に発病しやすい傾向があるため、明きょ設置や耕盤破碎、枕畝の途中に排水溝を設置するなど、排水対策を徹底する。
- ・圃場ごとに、植え付けた苗の苗床の場所や採苗日、ウイルスフリー苗などの購入先を記録する。

○早期発見のために

- ・定植後、少なくとも2か月間は、2週間に1回程度、地上部に変化が無いか必ず確認する。
- ・収穫前に圃場を観察し、地上部に株元の黒変を伴う葉の変色（黄変、赤変）がないか確認する。

※疑わしい症状を見つけたら、抜き取り等を行わず、速やかに最寄りの農業改良普及センターにご連絡ください。

茨城県総合防除計画におけるサツマイモ基腐病の遵守事項

茨城県では、全国的に発生しているサツマイモ基腐病について、すべての農業者（家庭菜園を含む）の皆様を守っていただくルール（遵守事項）を定めました（令和5年4月1日に施行された改正植物防疫法に基づくものです）。

○遵守すべき事項

- ・県が実施するまん延防止のための調査に協力する。
- ・本病の発生を確認した場合には、関係機関へ連絡し、関係機関の指導の下、発病株を抜き取り、圃場（苗床を含む）外に持ち出す。
- ・本病発生圃場では、2年間、サツマイモを作付けしない（関係機関の指導の下、栽培管理する場合を除く）。
- ・本病発生圃場から種イモを採取しない。
- ・本病発生圃場では、発生の拡大が無いことを確認する。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予測	発生概況および注意すべき事項
水稲	縞葉枯病	発生量：平年並	6月下旬現在、一部圃場で発生を認めている。 県西地域、県南の一部地域におけるヒメトビウンカ第一世代幼虫のイネ縞葉枯ウイルスの保毒虫率は、11地点中2地点で5%以上の高い値となった（5月30日発表 病害虫発生予報6月号 p2 防除所レポート参照）。
	ニカメイガ	発生量：やや多い	6月下旬現在、平年よりやや多い発生である。
	イネツトムシ	発生量：少ない	6月下旬現在、平年より少ない発生である。葉色が濃い水田では発生に注意し、発生が多い場合には、幼虫が小さいうち（葉先が巻かれ始める時期）に防除を実施する。
ナシ	ハダニ類	発生量：平年並	6月下旬現在、平年並の発生である。気温の上昇に伴い発生が助長されるので注意する。
ブドウ	黒とう病	発生量：平年並 ～やや多い	6月下旬現在、平年並～やや多い発生である。参考防除例を参考に、袋掛け前の防除を徹底する。
	べと病		
	褐斑病	発生量：平年並	6月下旬現在、平年並の発生である。参考防除例を参考に、袋掛け前の防除を徹底する。
	晩腐病		
夏ネギ	黒斑病（葉枯病を含む）	発生量：平年並	6月下旬現在、平年並の発生である。
	ネギハモグリバエ	発生量：平年並	6月下旬現在、平年並～やや少ない発生である。今後は気温の上昇に伴って増殖が速くなるので、発生圃場では速やかに防除を実施する。
夏秋ナス	アブラムシ類	発生量：多い	6月下旬現在、平年より多い発生である。
	アザミウマ類	発生量：平年並 ～やや多い	6月下旬現在、平年並～やや多い発生である。
共通害虫	オオタバコガ	発生量：やや多い ～多い	6月中旬現在、4月第1半旬からのフェロモントラップへの総誘殺数は、筑西市で平年より多く、土浦市、坂東市および龍ケ崎市で平年よりやや多い。ナス圃場で発生を確認している。
	ハスモンヨトウ	発生量：平年並 ～やや多い	6月中旬現在、4月第1半旬からのフェロモントラップへの総誘殺数は土浦市および龍ケ崎市で平年よりやや多く、筑西市で平年並～やや多く、銚田市で平年並である。

Ⅱ. 今月の気象予報

関東甲信地方 1 か月予報

(予報期間 6 月 28 日から 7 月 27 日)

気象庁 (6 月 26 日 発表)

< 向こう 1 か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率 (%) >

[確率]	要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
	気温	関東甲信全域	10	10	80
	降水量	関東甲信全域	40	40	20
	日照時間	関東甲信全域	20	30	50

[概要]

期間の前半は、平年に比べ曇りや雨の日が少ないでしょう。期間の後半は、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

< 1 週目の予報 > 6 月 28 日 (土曜日) から 7 月 4 日 (金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率 80%

< 2 週目の予報 > 7 月 5 日 (土曜日) から 7 月 11 日 (金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率 80%

< 3 週目から 4 週目の予報 > 7 月 12 日 (土曜日) から 7 月 25 日 (金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率 70%

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬の「ラベル」と登録変更に関する「チラシ」等を必ず確認し、適用作物、使用方法、注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には、周辺作物に飛散（ドリフト）しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、作用機構分類（FRAC コード、IRAC コード）の異なる薬剤を用いてローテーション散布しましょう。
- 5 農薬の使用後は、散布器具やホース内等に薬液が残らないように良く洗浄しましょう。